

1 課

7月2日

羊飼いの試練



安息日午後 6月25日

暗唱聖句

主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。
(詩篇 23 : 3、口語訳)

(主は) 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。(詩編 23 : 3、新共同訳)

今週の聖句

詩編 23 編、ローマ 12 : 18～21

今週のテーマ

ベッドルームのドアにもたれかかっていたソフィーは、そのまま床の上にくずれ落ちました。涙がとめどなくあふれ、またたく間に泣きじゃくり始めました。「彼が、彼がこんなことをするなんて……」。ソフィーは彼女の胸を引き裂くその知らせを聞いたばかりでした。友だちだと思っていたのに、尊敬し、信頼もしていたのに、その彼が、彼女の評判と彼女がしてきたことを台無しにするようなひどいワザを広めていたのです。彼女はベッドの上にあった聖書をひったくようにつかみました。すると、慣れ親しんだ聖句が突然目に飛び込んできました。「(主は) 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける」(詩編 23 : 3、4)。

「こんなことあるはずがない!」という言葉が彼女の口をついて出ました。しかし、論理的には事実のように思えました。詩編に登場する羊飼いは、羊たちを正しい道に導いてはいますが、その道は死の陰の谷を行く道でもあるように思えました。この友だちの裏切りという痛み、この暗い谷でさえ、神は彼女を正しい道に導くためにお用いになることができるのでしょうか。

今週のポイント

あなたは順境の時と逆境の時と、どちらで霊的により成長してきましたか。

「主は羊飼、わたしには何も欠けることがない」(詩編23:1)。

何人かの子どもたちに神様の絵を描かせてみると、どの絵にも例外なくハートマークがどこかに描かれていました。ハートを描いた理由を聞くと、口をそろえて、「神様は愛だから」と答えました。単純明快な答えです。

万事がうまく行っているときに、神とそこご計画について良く言うのは簡単です。しかし私たちが歳をとり、人生がつらく複雑になってくるにしたがって、私たちの神に対する見方が変わることがあります。もちろん神は変わりません(ヘブ13:8、ヤコ1:17)。私たちが変わるので。

旧約時代の人々は牧畜で生計を立てていましたので、詩編23編は、神の守りを描写するために羊飼を用いています。旧約聖書と新約聖書の両方において、羊飼いは神を描写するものとして象徴的に用いられています。それはすばらしい不変の情景の一つと言って良いでしょう。詩編23編を学ぶ前に、聖書記者によって羊飼いの働きや性格に対する描写がどのように異なるかを見てみましょう。

問1 次の聖句はそれぞれ羊飼いをどのように描写していますか。

イザヤ 40:11 _____

エレミヤ 23:3、4 _____

エゼキエル 34:12 _____

ヨハネ 10:14~16 _____

1ペトロ 2:25 _____

問2 また詩編23編の羊飼いは、羊の世話をするために何をしますか。

詩編 23:2 _____

詩編 23:3 _____

詩編 23:4 _____

詩編 23:5 _____

詩編 23:6 _____

あなたを守り導く羊飼いの描写はあなたをどのように励ましますか。また、苦しみの中で神を見失っている人をどのように勇気づけることができますか。

「主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる」(詩編23:3)。

あなたの前に遥か遠くへと続く「正しい道」(詩編23:3)を想像してください。その道の終わりは見えなくとも、あなたはその旅の終わりは神の家であることを知っています。そこからあなたの方へ少し目を移すと、その道が見えるのでしょうか。ある部分ははっきりと見えますが、ある場所は大きな、または危険な障害物によってまったく見通せません。その道は時には山の尾根に隠れて見えません。歩きやすい道もあれば、歩きにくい所もあります。それはちょうど、イスラエルの、エジプトから約束の地への旅のようであり、この詩編にもその旅路が同じように描かれているのです。

問3 詩編23編から、ダビデの目に映った、羊たちが主の家へと続く正しい道をたどる姿を想像してください。

その道はなぜ「正しい道」と呼ばれるのでしょうか。それは四つの重要な理由からです。第一に、その道は正しい目的地、すなわち羊飼いの家へと続く道だからです。第二に、その道は正しいお方、すなわち羊飼いなる主との調和の中に私たちを入らせる道だからです。第三に、その道は私たちを正しい民、すなわち羊飼いなる主に似たものとなるよう訓練する道だからです。第四に、その道は私たちに正しい証し、すなわち私たちが正しい民になることによって主に栄光を帰す機会を与える道だからです。その道が歩きやすかろうと、歩きにくかろうと、それが「正しい」道なのです。

神が私たちを導かれるとは、単に目的地へ案内をすることではないことを理解しておくことが重要です。それは案内や守り以上のものだからです。聖書全体を通して見られる、神がその民を導かれた多くの例(アブラハムを約束によって導いた例、または火と雲の柱によってイスラエルを導いた例)のように、神が導かれるとき、そこには常に、民が正しくあるための訓練が伴うのです。

正しくあることは、羊飼いなる主が第一にお求めになることであることについてあなたはどれほど意識しているでしょうか。キリストの品性をよりよく映すものとするために、試練はあなたの人生をどのように変えるでしょうか。

「死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける」（詩編23：4）。

正しい道が、いつも冷たい流れのそばの草で覆われた土手に沿って続いているれば良いのですが、ダビデが描く道はそのような道ではありません。その道は、私たちが決して望まない死の陰の谷を通っていることもあるのです。イスラエルでは、1年のある時期には水のない涸れた川や溪谷が見られますが、それらの川はしばしば、予期せずに鉄砲水となって襲いかかります。そのような谷は、光を遮るほど険しく幅の狭い峡谷であることがその特徴でもあります。したがって、「死の陰の谷」は「非常に暗い陰」または「深い闇」を象徴しています。

問4 あなた自身が「死の陰の谷」にいた時のことを思い出してください。羊飼いなる主が共におられることを知っていても、なおそれは恐ろしい経験だったことでしょうか。その時にあなたを力づけた聖句は何でしたか。そしてそれはなぜでしたか。

問5 羊はどのようにして「死の陰の谷」に迷い込んだのでしょうか。自分で行ったのでしょうか。それとも羊飼いがそこへ導いたのでしょうか。

エリザベス・エリオットは次のように書いています。「死の陰の谷にいるのに気づいた小羊は、自分が誤って導かれたと思うかもしれない。しかし、暗闇を通り抜けることは、彼が恐れるべきでないことを知るために必要だったのである。羊飼いがそこでもなお彼と共にいるのだから」（『愛を求めて』218ページ、英文）。

あなたは谷に「誤って導かれた」と感じたことはありますか。そのような時にあなたは神にどのように応えましたか。救い主なる主はなぜ、暗い谷に私たちが入り込むことを許し、誤解されるかもしれない危険を喜んで負われるのでしょうか。

「わたしを苦しめる者を前にしても／あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる」（詩編23：5）。

私たちの人生には何らかの敵が存在することは避けられないとすれば、それらの敵とどのように向かい合えばいいのでしょうか。寝返りを打ちながら、あなたを傷つけ、あなたの仕事を妨害しようとする人たちへの復讐^{みくしめう}を想像した夜はなかったでしょうか。敵にどのように対処するかは、クリスチャンにとって難しい問題です。

問6 あなたは今までに、あなたを傷つけようとする人たちや、あなたを悩ます人たちにどのように対応してきましたか。マタイ5：44のキリストの言葉やローマ12：18～21のパウロの言葉に、あなたはどのように従いましたか。

詩編23：5で、ダビデは敵と向かい合うための興味深い方法を示しています。それは、神が彼のために進めておられた晩餐の準備に目を向けることによって、敵の存在から目を離すことでした。

ダビデが学んだ慣習では、祝宴に招かれた特別の客人が入室する際は、その家の主人は客人の頭にと香水を混ぜたオリーブオイルを注ぎました。その後、客人は通常よりもはるかに多くの食事が置かれた席に着くのでした。

問7 詩編23：5に出てくる三つのもの（食卓、香油、杯）は、「谷」にいる時でさえも神が私たちをもてなしてくださることをどのように表していますか。

パウロが言っているように、「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするもの」（エフェ6：12）です。私たちの敵には見えるものと見えないものがあります。どちらを好むかによらず、私たちはそれらの敵に囲まれています。しかし、私たちが羊飼いなる主と共にいる限り、いずれの敵も、主が私たちにお与えになったものを奪うことはできないのです。

敵に囲まれるような数々の困難にあっても、羊飼いなる主があなたをもてなしてくださったことを思い起こすとき、主にどのように感謝できますか。

「命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう」（詩編23：6）。

谷にいるとき、敵に囲まれているとき、人は孤独だと思い込みます。私たちは神の存在を常に強く感じるわけではありません。神の助けがあれば初めからこんなことにはならなかったはずだと考えます。しかし、ダビデはそうのように考えていません。

問8 詩編23：6でダビデは、試練の中であってどのような二つの確かなことについて述べていますか。（エフェ1：4、2ペト1：10、ヘブ11：13～15も参照）

ある翻訳には、慈しみと変わることもない愛（契約に対する神の誠実）が、私の命のある限り私に「ついてくる」とありますが、原語の「追う」という動詞には、「迫ってくる」というもっと強い意味があります（創14：14、ヨシュ10：19、サム上25：29では、その意味がさらに明確です）。

問9 主の慈しみと変わることもない愛があなたに「迫ってくる」と表現することによって、ダビデは神について何を伝えようとしたのでしょうか。

谷がどれほど深く、敵がどのように執拗であっても、神の慈しみと変わることもない愛の確かさと、旅の終わりまで続く主の導きの約束は確かです。このような考えがカルバリーのイエスを支えたとすれば、私たちにも勇気が与えられます。

しかし、私たちが気にかけている人々が疑問に満たされるとき、そのような心配と対処する最善の方法は、神は何ができるかを神学的に解説することではなく、ダビデが詩編23：6で示したように、神の真理についての個人的確信を分かち合うことなのです。

神の慈しみと変わらない愛に迫られた経験はありますか。聖書にはどのような実例がありますか。それらを、神の愛の確かさを疑う人たちとどのように分かち合えるでしょうか。「迫ってくる」愛の最大の例は十字架だと言えるでしょうか。

参考資料として、『各時代の希望』第52章「よい羊飼^い」を読んでください。

「最後に勝利を得る者は、その信仰生活の途上に、恐ろしい患難と試練の時期があることを覚悟しなければなりません。しかしこれは、キリストの学校の訓練の一部分であり、あらゆる不純物を取り去るために、無くてはならない試練なのですから、私たちはそういうときにも確信を失ってはいけません。神の僕である者は、堅固な心を持って、敵の攻撃や非道な嘲弄^{ちょうろう}に耐え忍び、サタンが路上に置く障害物を征服しなければなりません……。

けれども、もし私たちが足もとの困難ばかりを見ないで、天に目を注いで進むなら、途中で気を失うようなことはありません。上を仰いで進んで行くとき、そこには、私たちが助けようとして手を差し伸べておられるイエスのお姿を認めることができます。その時私たちは、単純な信頼の中に手をイエスに差し出して、イエスに導いていただければよいのです。信頼の思いを持つとき、そこには望みが生じます……。

私たちにイエスご自身の完全な品性を着せ、私たちを向上させ、高貴にし、そして神の国の住居にふさわしい者とするために、神は最上の賜物として独り子イエスさえお与えになりました」(『希望への光——クリスチャン生活編』366、367ページ、『青年への使命』51～53ページ)。

話し合いのための質問

- ① あなたの人生に訪れる「恐ろしい患難と試練」が実は、「キリストの学校の訓練の一部分」かもしれないことについて、あなたはどの程度自覚していましたか。
- ② 私たちの助け、慰め、そして励ましが、どのように「谷」にいる人たちを導く羊飼^いなる主の道の一部となって、彼らが危機を乗り越える助けとなることができるでしょうか。
- ③ クラスでそれぞれ「迫ってくる」主のあわれみと恵みについての経験を分かち合いましょう。各自の経験から何を学ぶことができるでしょうか。
- ④ キリストが試練に向かって行かれたその生涯の最後の場面について考えてください。人性を取られたイエスは、どのようにして試練に耐えることができたのでしょうか。試練に直面したとき、私たちも主の模範^{もはん}に倣^{なら}うことができるでしょうか。

悪霊に取りつかれた11歳の少年

「エドゥアルド！ お昼ご飯の前にシャワーを浴びてきなさい」と母親が言いました。11歳のエドゥアルドが、汗だくのまま台所に向かうと、リビングルームにはネイルを待っている見知らぬ女性がいました。自宅で美容サロンを営んでいる母親のお客さんでした。エドゥアルドはシャワーの前に少し休もうとして椅子に座った途端、邪悪な叫び声を上げ始め、^{けいれん}痙攣し始めました。母親が駆け寄ると、彼の口から低く歪んだ声がして、「息子を引き渡すか、死ぬのを見届けるか、選べ」と言いました。リビングルームにいた女性が泣き崩れる母親の背後から近づき、「心配しないで」と言いました。「私はカンドンブレの指導者です。あなたの息子は私たちのグループの一員に選ばれたのです」

カンドンブレとは、19世紀初頭にアフリカから奴隷船でブラジルに渡って来た宗教のことで、神々の霊が人に降ると教えています。しかし、その霊は神ではなく、墮落した天使です。エドゥアルドは、その見知らぬ女性を取り囲んでいた軍団の悪霊の1人に取りつかれたのです。しばらくして悪霊は去り、エドゥアルドは元に戻りましたが、その出来事を覚えていませんでした。母親が彼をカンドンブレの寺院に連れて行くと、司祭たちはエドゥアルドを王様のように歓迎しました。ある人は、「光栄なことですね」と言い、別の人は、「あなたは選ばれたんですよ」と言いました。わずか11歳で心霊術と悪魔崇拝に出会ったエドゥアルドは、それから7年間、寺院で多くの時間を過ごし、司祭になるために学びました。悪霊たちが彼に語りかけ、彼を通して人々に語りかけました。最も重要な教えは、決して仕事を途中で放り出してはならないということでした。仕事を始めたら、必ずやり遂げなければならないのです。

大人になったエドゥアルドは、ある寺院の大司祭になり、依頼を受けて人を呪い、お金をもらっていました。しかし、すべての人を呪うことはできませんでした。悪霊たちによれば、セブンスデー・アドベンチストと他のプロテスタントのクリスチャンは保護されており、彼らを呪おうとすれば、エドゥアルドは力を失ってしまうとのことでした。また、アドベンチストやプロテスタントの人たちとの交流も禁じられていました。

エドゥアルドは、オリベイラという内縁の妻との間に、息子のジュニオールをもうけました。ジュニオールがセブンスデー・アドベンチスト教会に入りたいと言いつつ、平穏な暮らしが続いていました。

(アンドリュー・マクチェスニー)